第２回　小豆島町総合教育会議

【日時・場所】

○開催日時　平成 27 年 8 月 6 日（木）　午後 1 時半～午後 3 時
○開催場所　研修室
○出 席 者　塩田町長、後藤教育長、高松商業高等学校　中筋校長
熊坂委員、岡田委員、黒木委員、岡本委員
○同席者　【町職員】
松本副町長、松尾副町長、空林総務部長、坂東教育部長、松田社会教育課長、後藤子育ち共育課長、高橋教育指導室長
【教育関係者】
小玉小豆島中学校校長、片山池田小学校校長、羽座星城小学校校長、三浦安田小学校校長、川井苗羽小学校校長、安藤園長（星城・安田・苗羽幼稚園）、川口園長（旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園）、真渡小豆島こどもセンター長、増田小豆島こどもセンター所長、大岡内海保育所所長、慈氏草壁保育園園長
○傍聴者　9 名
○事務局　4 名

【内　　容】

［塩田町長］　挨拶
　この小豆島総合教育会議では、小豆島町の教育大綱をこの場で議論し決定する。早ければ年末、遅くても年度末までに教育大綱を決定していきたいと思っている。それまでの間は、いろいろな方に意見を聞き、委員の中での意見交換をしていきたいと思っている。
　今日は、今年の 3 月まで小豆島高等学校の校長であり、現在は高松商業高等学校の校長をされている中筋校長から、小豆島町と小豆島の教育の在り方について経験を踏まえてお話をうかがいたい。

［中筋校長］　挨拶
　私は、大学を卒業して新米教師で 4 年間、校長になり新米校長で 3 年間、合計 7 年間小豆島高等学校でお世話になった。4 月に小豆島高等学校を離れて、高松商業高等学校へ勤務することとなり、目の前の仕事で精一杯で小豆島で行ったことの整理をできないままでいたが、この会議に参加することになり整理し振り返る機会ができた。私が考えていたことの整理として話していきたいと思っている。
　今日は、3 つの点について話をしていきたい。1 つ目は、小豆島だからこそできる教育

とは何かということ。２つ目は、平成２９年４月に土庄高等学校と小豆島高等学校とが統合されるが、その統合高校への期待について。その他ということで３つ目をあげている。

まず初めに、小豆島だからこそできる教育であるが、私が小豆島高等学校で勤めている際に非常にありがたかったのが、町による教育支援であった。そこには、財政的支援と本物に触れられる機会の提供がある。財政的支援から言うと、中学校の教員から聞くと、教員の加配があり、特別支援であったり、英語であったりしっかり手助けしてもらいながらひとりひとり手厚く指導することができる。これが本当に強みであると、中学校の授業を見て話をうかがう中で感じた。高校は県立高校であるが、小豆島高校に対して大変な支援をいただき、現在もいただいている。例えば、部活動で活躍する生徒に対しての助成や、学力向上のための助成である。今年度では、小豆島高等学校は総合学習の中で、リクルート社が提供している受験サプリを一年生で取り入れている。この受験サプリは、予備校のような勉強が中心であるが、区立和田中学校の民間人校長をされていた藤原和博さんがすすめられた「よのなか科」を素材として、子どもたちに思考力、判断力、表現力、あるいは主体性などを身につけることが期待されるプログラムがある。与えられたことを、ただするのではなく、自ら力をつけてほしいということで導入した。これには、勉強だけではなく、スポーツ、文化活動、人間としての生きる力、そういった面で出てくるのではないかと期待している

また、財政的支援でありがたいのが、高校卒業してからの子どもたちが県外へ大学や専門学校、短期大学に進学するための手厚い奨学金制度である。これを有効活用して、人材育成になっていければと思う。こういったような、県立高校に対して町から支援を受けることはなかなかできないと思う。本当に恵まれていると感じた。

そして、本物に触れられる機会の提供ということで、よく塩田町長が言われているが、私が高松の高校に勤務するようになって実感している。例えば、高松の生徒は芸術鑑賞へ行く機会、高校生対象の研修会や講習会の参加する機会がすぐ近くにあるためたくさんある。ところが、島の子どもたちはそれがなかなか難しい。そこで、意識的に瀬戸芸であったり、ままごとなどを活用したりすることで、意図的に接する機会を作るということが、子どもたちにとってプラスになる。本物に触れられる機会を年に数回でも、教員たちが取り入れることができたらと思う。

次に、幼、保、小、中、高の連携について、小中の連携や、中高一貫の学校であればその部分であるかもしれないが、幼、保から高校までの連携はなかなかないことである。一昨年から、分科会などに高校も参加させてもらっているが、これに参加することによって、小学校や中学校がどんなことをしているか把握できるようになった。例えば、清掃など高校生になって今まで出来ていたことが出来なくなることがある。教員たちが指導はするが、なぜ出来ていないかということを話し合った結果、その理由として、子どもたちが今までどのような指導をされてきたかを高校教員がわかっていない、また生徒たちが今まで教わってきたことがこれからも大事であるということを理解していないという点があった。連携とは単に情報交換をするだけではなく、同じ方向にベクトルを持っていくことであり、それができたらと思う。連携については、５つほど実践できればと考えていたことがある。１つ目は、能動的な学習により実践に強い人材の育成である。今朝の新聞にも掲載されて

いたが、次の学習指導要領がオリンピックの年から、小学生に導入され、１年後には中学生、２年後には高校生に導入される。高校でも、日本史と世界史が一緒になり、歴史総合というものになるなど、大きく変わってきている。今の学習指導要領の検討の中で、アクティブラーニング（能動的な学習）というものがよく出てくる。これは、小中学校ではできており、高校では教員が一方的に教えており実践できていない。これからは、大学入試にも、このアクティブラーニングで育成できると言われている思考力、判断力、表現力や主体性といったものが求められる。私は、こういったものが実社会に出て役立つものだと思っている。こういったものを連携の中で育てていけないか。

２つ目に、英会話ができる人の育成である。観光の島であるとひとつ考えると、外国からの観光客に簡単でもいいので、道案内、施設についての説明など、パターン化されているので、中高生どの子に聞いてもできるぐらいのものにしたい。そのマニュアルなどを、中高生が一緒に作成することができるのではないか。それにより、生徒たちが関心を持ってくれれば、学力も伸びていくのではないか。

３つ目に、心豊かな人の育成について。島にいる人も、島外にいる人も郷土愛が強い。それぞれ、連携する中でその段階に応じた郷土愛も育成できるのではないか。また、観光、人を外から呼び込むためには、マナーアップをまだまだ育てていく必要があると思う。

４つ目に、全国レベル、国際レベルのスポーツや文化活動についての人材育成である。これも連携の中で出来ていくのではないか。

最後に、一人ひとりを大切にする特別支援教育である。これは、現在もっくりこの会で連携がとれている。もっと、連携がとれていければと思う。その他にも、小豆島の自然や歴史のなかで考えれば、いろんなところで取り組んでいけるのではないかと感じる。

次に、教育資源の活用であるが、学習したことが社会に出たら役立つということを理解させることが私たちの役割だと思っている。それを理解すれば、子どもたちは身につけていくだろうと考える。人というところから、商業の部門から言うと、島の経営者の方の話を講演会の形ではなく、二人目の教師として授業の中で話をしてもらい、その残りの時間で授業として発展させていけるのではないか。理科や生物の科目でいえば、島の得意とする食品加工に関する方、公民であれば、町職員や税務署職員などから話を聞いたりすることから授業に発展させることができるのではないかと考える。また、物というところでいうと、岬の分教場の活用である。新採用の教員と小豆島高等学校の教員も参加した４月の研修会に私も参加したが、新鮮な気持ちになった。こういったところで、例えば平和教育の推進であったり、幼保からの連携の中で取り組んでいけるのではないか。また、県では五色台での学習合宿が実施されているが、外からの学習合宿の誘致をすればその場が、もっと活用できるのではないかと思う。

統合高校への期待について、生徒数が増えることにより、学習や部活動などの面で生徒の多様なニーズに対応できる活動が可能にはなるが、あえて特色ある取り組みに絞るべきだと思う。それは、大きな高校は総合力が違うと、高松商業高等学校に勤務し思った。ただ、小さくても、小さいからこそ柔軟性があり、特色があると思う。

そして定時制の充実であるが、私は定時制の教員の経験もあり、自分の中では定時制、通信制教育への思いが強い部分がある。定時制というのは全日制に行けない子が行く、非

常に暗いイメージがあるが、決してそうではない。中学校まで不登校であった子どもたちが多いが、定時制ではほぼ欠席をせず登校している。そういった子どもたちがゆったりとした生活の中で、徐々に力をつけ、慶応や早稲田大学へ進学したりした。個に応じた指導により人間力がアップできる。また、科目履修生制度の活用とあるが、地域の大人に学びたい部門を生涯学習の一部として一緒に学んでもらい、交流することが生徒にも非常に大きく身につく。

その他として、県の高校校長会があるがその場で地方創生に高校がどういった働きができるかを話し合っている。何ができるか結論は出ていないが、高校がどういう役割を果たせるのか本気で考えています。また、四国の商業高校の校長会のなかでも、商業高校として何ができるかという役割を話し合っている。人を育てるというなかで、どういったことができるか考え、実践していこうと思っている。

そして、土庄町との相互理解、共通理解であるが、統合はもう１年半後に控えている。統合高校を作っていく上で土庄町を放って連携はしていけない。町同士、教育委員会同士で協議するべきである。足並みをそろえることもあるだろうし、それぞれの町の特性を生かし、バラエティに富んだ取り組みができるのではないかと思う。社会に役立つ子どもたち、そして島の活性化に役立つ子どもたちを育てるという目的を念頭において、一緒にやっていくべきである。

最後に、SWOT 分析とあげているが、これはプラスとマイナスが何事でもあるが、内部（小豆島町の教育）での強み弱み、小豆島町を取り巻く外部環境にも教育にとってプラスになる強み、マイナスになる弱みがある。これから分析した結果を、皆で知恵を絞り書き出して戦略に使っていくことを、幼保から連携して行っていくと良い考えがでてくるかもしれない。

[塩田町長]

それでは、今の中筋校長先生のお話について、質問や意見を委員の方からお願いしたい。

[後藤教育長]

英会話ができる人の育成ということで、観光化、国際化にむけて幼保小中の連携の中でそれぞれの段階で教育委員会として、取り組んでいくことができると思う。中筋校長先生に良い考えがあれば教えていただきたい。

[中筋校長]

具体的にあるわけではないが、自分が高校のときに道を尋ねられたことがあり、頭の中では考えられても、発音が通じず、結局目的地の近くまで案内した。なので、ある一定の形式でパターンをいくつか覚えることは、中学生ぐらいで出来るのではないかと思う。

[熊坂委員]

島の子どもが高校を卒業してからどう活躍できるかということ。島にいる子どもたちは、卒業すれば、進学あるいは就職など大多数が親元を離れていきます。そういう意味で、高

校卒業までに、社会人としてあるレベルまでは到達していなければならない。そういう点で、小中高と共通したひとつの流れのなかで、生徒を育てていく必要がある。そして、高校卒業時点で、私たちが受ける試験の中で一番難しい大学入試がある。運転免許などとは違い、競争試験であり、勝ち抜かなければならない。この大学入試を突破できる学力を島の中で養成していかなければならない。高校だけではなく、小学校、中学校から力を確実につけていかなければならない。それと同時に、島外に出ていくということは、社会人として一人前の判断のできる、一人で世の中に出て生活していかなければならない。そういうレベルの社会性を備えて送り出さなければならない。どういう子どもを育てていくか、どのレベルまで育てるか、学校だけではなく地域の皆がどういうふうに地域の一人として、子どもたちを見ていくかが非常に重要である。また、学力で言えば、学力テスト等いろいろあるが、それは通過点であり、大学入試が最終到達点でなければならない。それに向けて、確実な学力をつけていくことを考えていかなければならない。

[岡田委員]
　小豆島だからこそできる教育という点で、小豆島で育ち成長し、そして島外へ出ていくとなった時に、家庭教育でもあるかもしれないが、ご飯の炊き方等生活面での自立、しつけを親が教えておくべきである。また、本物に触れられる機会の提供ということで、高松に出ると本当に芸術など触れる機会がたくさんある。生の音楽や芸術の鑑賞、生のものに触れる機会を与えてやりたいと思う。お年寄りと子どもの交流を含め、伝統の文化を知る機会を老人クラブや子ども会、自治会を通して作っているので、こういったことも続けていきたいと思っている。これから私たちができることを皆さんと相談しながら考えて行きたいと思っている。

[黒木委員]
　新しい高校での第一期生がどういった結果を出すか非常に期待している。統合してよかったか否か問われるところである。ほとんどの子どもが高校を卒業し、島外の大学等に出ていくが、その子どもたちが一人でも多くの子どもたちが島に帰って、島のために活躍をしてもらえるような場を設けることも私たちの責任であろうと思っている。土庄町との相互理解が非常に大事であることも踏まえ、新しい高校が育つ高校になるように協力をしてほしいと思っている。

[岡本委員]
　小豆島にいるがゆえに、中学校を卒業しても同じ地域にとどまり高校も小豆島高校に行くということがほとんどである。子どもたちも親も同じという幼保小中と地域一丸となって協力しているのが今の小豆島町だと思っている。それを生かして、新しい高校も地域力を生かした高校にしていければと思っている。
　中筋校長先生のお話の中で一点興味があったのが、定時制の充実という話である。不登校の子どもでも可能性はあるんだという中で教えていただきたい。中学校で不登校だった生徒が、定時制の高校へ行くという段階で、何かきっかけ作りやフォローの仕方など、ど

ういうふうになされたのかお伺いしたい。

［中筋校長］
　特に仕掛けをしたり、フォローをしたりするわけではないが、ひとつとして環境の変化が一番大きいのではないかと思う。小中学校で登校できなかった子どもたちは、全日制になると１クラスの人数も多いが定時制になると少人数であり、不登校経験者が複数名おり、この環境の変化によって、登校しやすいのではないかと思う。人数が少ない分、教員が一人ひとり丁寧に指導していくというところが大きいのではないか。また、新しい統合高校でも、子どもたちが育つため、配慮した教員の人材配置を要望したところ、県教育委員会がするということであった。
　そして、熊坂委員の言われていた大学入試であるが、現在の中学校１年生が高校３年生になったときに、大学入試の制度が大きく変わる。現在のセンター試験がなくなり、大学進学希望者学力評価テスト（仮称）というものが導入される。また、大学進学を希望していなくても高等学校基礎学力テストというものが導入される。覚えていたら解ける問題ではなく、考えていろいろな知識を踏まえて回答する問題に変わっていく。

［塩田町長］
　私は５年前に小豆島に帰ってきたが、なぜ東京で頑張れたかというと、小豆島に生まれ育ち、小豆島の幼稚園、小学校、中学校、高等学校で勉強したからであり、小豆島で学んだことが自分の支え、誇りであったからである。
　高松商業高等学校に勤務になり４か月たつが、高松商業高等学校の生徒にあって小豆島高等学校の生徒にないもの、またその逆はあるか。

［中筋校長］
　高松商業高等学校の生徒というのは、学力やスポーツにおいて一定レベルの子たちが集まっている。小豆島高等学校の場合は、地元の子がほぼ全員来るので、学力だけでいうとなかなか難しいかと思う。ただ、高松商業高等学校の生徒に一番足りないと思っていることは、スポーツだけしていたらいいなど割り切っており、環境が整っているが持っている力を発揮していない。今の私の仕事のひとつとしては、生徒たちが今持っている力はもっとあるということ、力をつけていくということを教えているところである。これは小豆島高等学校にいたときにも言っていたことである。小豆島高等学校の生徒は、大切に育てられた子どもが多く、高校も少人数なので一人ひとりの顔が見えた教育ができることが最大の強みだと思っている。子どもたちが高校の３年間で気づいて育っていっていると感じる。高松商業高等学校にはなく小豆島高等学校にあるものは、そういった環境や子どもたちの意識の変化である。

［塩田町長］
　中筋校長先生が在校生としていたころと、今の高松商業高等学校の生徒は違うか。私は自分がいた頃の小豆島高等学校と今の小豆島高等学校の生徒は全然違うと思う。

［中筋校長］
　同じところもあれば、違うところもある。それは社会が変わっていくことの影響が大きいかと思う。環境が整っている分持っている力を発揮しないといった部分が違っていると思う。自分のときは自ら学ばなければならなかった事も、今は教員が指導し教えてくれるといった環境が整っているが、自ら学ぼうとしないところが増えていると感じている。この悪循環を断ち切るため、教員らと話し合っていくところである。

［塩田町長］
　私が小豆島高等学校にいた時と今の小豆島高等学校とでは何が変わったか。元校長としてどう思うか。

［中筋校長］
　以前どうだったかはわからないが、三十数年前私が赴任してきた頃は、島出身で力をもたれた先生が多かった。現在は、力がないわけではないが、まだノウハウがない経験のない先生が多い。小豆島高等学校は島であるので、通勤が困難なこともあり、配置しやすい先生を県教育委員会が決めていると感じる。ただ熱意は強い。

［塩田町長］
　変わったのは、先生と周りの大人たちであると思う。みんな仲良くはとても大切であるが、それだけでは子どもたちは伸びない。勉強やスポーツの分野で、それぞれの能力を伸ばしてあげなければならない義務が私たちにはあると思う。

［中筋校長］
　それは大切なことだと思う。そして、子どもの数が少人数なので委員会や部活など一人にかかる負担が大きくなってきている。

［塩田町長］
　確かにそうである。それが負担となり、伸ばせる能力が伸ばせなくなっていると思う。

［後藤教育長］
　私の頃は１学年８クラスあり、３５０から３６０人の生徒がいた。そのなかで、それぞれに役割があったのは確かではある。ただ、今の生徒でも個々にあった能力の伸ばし方を学校、教育委員会一丸となって取り組んでいくべきである。今日話を聞く中で、小豆島だからこそできる教育とあったが、それに合わせて、小豆島だからこそしなければならない教育があると思う。１つは、小中高と意識をして最高の学力を身につけていかなければならない、そして社会人としての自覚をそれぞれの段階で意識を変えていくということが重要であると特に感じている。

［塩田町長］
　もう一つ心配していることがある。新しい高校ができるが、高松の高校へ行ったほうがいいんじゃないかという保護者もいる。それは絶対あってはいけないことだと思っている。小豆島で学んだことが外に出た時に財産になると思っている。選択の自由ではあるが、できるだけ皆小豆島の高校へ行き、切磋琢磨して欲しいと思っている。

［中筋校長］
　子どもたちが選んでくれるためには、高校として実績を積むしかないと思っている。今社会で求められているのは、バランスの良い人材である。高校生も、勉強だけ、スポーツだけではなく、文武両道一生懸命取り組むことが大切である。

［塩田町長］
　それぞれのタイプがあるので、それぞれにあったバランスがあるのだろうが、それは非常に難しいことである。

［中筋校長］
　統合高校ではいろんなことができ、生徒の多様なニーズに対応できる活動が可能になると思う。

［小玉小豆島中学校長］
　小豆島を離れた子どもたちに、いずれは小豆島に戻ってきて欲しいと思っている。帰ってきたくても、仕事の場がなくて帰ってこられない場合もあるが、むしろ小豆島で起業するぐらいの高い志をもてる教育をしていきたいと思っている。何事も高い志を持つことが大切なのではないかと思う。

［片山池田小学校長］
　生活習慣や、学習習慣についてもしっかり、幼保小中高と連携していかなければならないと思う。能力を伸ばしていくことも大切であるが、初めからどの面で伸びていくかわからないので、小学校の時点では、いろいろな面で可能性を伸ばしていきたいと思っている。

［羽座星城小学校長］
　土庄町で校長をしていたが、小豆島町で校長をすることになり、町からの教育支援は力を入れていただいていると感じる。幼保から高校までの連携についても同じように力を入れていると感じている。小学生の段階では、それぞれの良いところを見つけて、それをまた伸ばしていきたいと思っている。

［三浦安田小学校長］
　私も町からの支援は手厚いと感じている。小学校として取り組んできたことは、キャリア教育、道徳教育である。バランスが悪い子でも、その子のいいところを伸ばしていくこ

とが大切であると思う。

[川井苗羽小学校長]
　自尊感情の育成を学力からも取り組んでいきたいと考えている。アクティブラーニングとあったが、小豆島の子どもたちは大事に育てられている反面、自分から進んでやっていくという力が不足していると感じている。それを学校教育において取り組んでいかなければならない。町の支援を受けるだけでなく、学校としても自ら動いて学校を作ることによって子どもを育てていく、教職員も育てて輩出していくような機能を活かしたいと思っている。音楽部に関しても神戸市の合唱団と交流し、町としても観光大使としてやっていけるような関係づくりに取り組んでいる。